



スタデー・ツアー

九月十日から十日間、タイのモン族を訪ねる旅をする。



どんな援助ができるかを発表する事前学習会

昨年秋のヨーロッパ巡礼の出発直前に肺炎になったためキャンセルし、今年三月に改めて計画していたが、二月に妻が脳梗塞で入院し、旅行どころではなくなりました。

退院した今も左半身にマヒが残り、海外旅行は無理。なのに妻を娘に預けて一人で旅に出ることにしたのは、観光旅行もどきの巡礼の旅ではなく、スタデー・ツアーだからである。

一九九五年に娘のリカがパレスチナの母子保健プロジェクトにかわり始め、妻を中心にパレスチナを支援するNGO活動のワード・パレスチナも始まった。

た。（ワードはアラビア語で「約束」）山口県内にもたくさんNGOがあり、それらを結ぶNGOネットワーク山口がある。その中の一つ、シャンティ山口は一九九三年からタイのモン族を支援しているNGOで「世界中の貧困と抑圧にあえぐ草の根の民衆を支援し、すべての民族とともに生き、ともに学ぶ地球市民社会の実現と、地域の国際化、地球市民教育」を目的に活動している。

今回のスタデー・ツアーはこのシャンティ山口が活動している現地を訪ねるもので、参加者は大学生二人を含む六人。

一緒にパネル展などをしたこともあってシャンティ山口の活動には以前から関心を持っていた。

インドシナ内戦でモン族の多くが難民となり、タイの難民キャンプや山岳地帯で自給自足の貧しい生活を営んでいる。

シャンティ山口は彼らの自立を支援し、中学、高校への進学を助けるための学生寮を開設し、また村にトイレを作り、そのトイレから出るガスを集めて幼稚園の給食の炊きをする「エコ、循環トイレ」を開発した。

日本の肥だめの原理をヒントにしたというから面白い。ぜひ実際に見てみたい。

実はスタデー・ツアーは私の海外とのかかわりの原点なのだ。二十七年前の昭和五十六年、教会の地区役員をしている時、フィリピンへスタデー・ツアーをした。

フィリピンへの売春ツアーが最盛期だった時期で、カトリック国フィリピンの本当の姿を体験しようと呼びかけ、大学の寮を拠点にスラムにホームステイしたりしながら、貧しい人たちの自立を模索した。

三年間、交流が続けたが、現地の日本人シスターが転勤すると次第に薄れ、今では神父を通じて山の貧しい少女二人の学費を支援しているに過ぎない。

サラリーマンだったのだから仕方がなかった面もある。しかし今は時間がある。もう一度、原点にもどってNGO活動を考えてみたい。

表通りの玄関先を素通りする観光旅行ではなく、支援を必要としている人たちとの対等の交流を詳しく報告したいと考えている。（元山口放送取締役ラジオ局長）



モン族についての参考書